

『エルクウ・キラース』

著作 ash

この作品は『痕』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.2）を元にした創作です。

5B、対峙（たいじ：向かい合って立つこと）

そーっと様子を確認してみると、そこにはあろう事か梓の姿があった。まだ俺には気付いてないらしいが、それ以外に人がいる雰囲気でもない。

何だって、梓だけなんだ？

せめて初音ちゃんが一緒だったら、まだ梓も多少はおとなしく……なる訳やないか、あいつが。

それにしても、俺がここにいるのに気付かないなんて、梓も結構鈍いな。

俺はこっそりと近づこうと思い、ゆっくりと物音を立てずに歩き出した。

一歩踏み出しても、梓はそのままだ。ドアにもたれかかって、何だかぼーっとしてるようにも見える。

珍しいな、あいつがあんな風にしてるのも。

さらに一歩。梓は相変わらずだ。

……ちよっと変だな。

もう一步踏み出す。やっぱり変化なし。

おかしいな。…いや、こいつの事だから、また俺をからかおうとしてるのかも知れないな。うん、そうに違いない。

と、ある程度近づいた時、梓がふいに俺の方を向いた。

ほら、この後は「分かってたよ、バーク」とか言うに決まって…

「…耕……………」

…あれ？

何か違うな。

「お、遅かったじゃないか…」

おや？ 怒ってない？ あの梓がか？

「…梓、お前調子悪くないか？」

「な、何よ、いきなり…」

「いや、ちょっと気になって…。熱とかないだろうな？」

「あ、ある訳ないだろ？」

「そうか？ どれどれ…」

と、俺が何気なく梓の額に手を当てると、梓は乱暴に俺の手を振り払い、

「ばっ、バカヤロー！」

と叫ぶ。

何となく熱いような気もするし、心なしか顔も赤くなってるようだ。

「ちょっと熱っぽいみたいだけだな？ 顔も何だか赤いし」

「馬鹿！」

「何だよ、人が心配してるってのに…」

「心配させたのはどっちだよ！」

「お？」

「一晩中どこに行ってたんだよ、一体」

さすがに女友達のところ、とは言えないよな…。

「ああ、そりゃ大学の友達のことだ。急に壮行会やってくれるってもんでね」

「だったら、連絡くらい入れろよ！」

「悪かったと思ってるよ」

「何回電話したと思ってたんだよ！」

「え？ 電話って？」

「ここだよ、ここ」

ついさっきまでは、「おとなしいな」なんて思ってたのがうそみたいな変わりようだが、

そもそも梓の本性はこんなもんだ。

「…とにかく、中に入れよ。こんなところでやりあっても、目立つだけだ」

今のところ周りに視線を感じたりはしないが、梓がこの調子じゃ時間の問題だ。

そして、俺が鍵を開けて、梓を中に促そうとしたら、開けたドアの前で梓が何やらため

らいがちにしている。

「そ、その、入っていいの？」

「何やってんだ？」

俺が怪訝そうな表情を見せても、梓の反応はあまり変わらなかった。

「え…、だから…、入っても構わないのかって聞いたんじゃない…」

さっぱり得ない質問だった。

「…俺はさっきから、『入れ』って言ってるんだけどな」

「そ、そうだよ。ははは、たかが耕一の部屋に入るくらいで、あたしも大袈裟だよ」
何を考えてるのか、さすがの俺にもよく分からない。ただ、「たかが」という表現が
ちよつと引かかった。

と、そんな事を言っても、話は一向に進まない。まずは梓をテーブルの脇に座らせて、
話を始めた。が、どうにも梓の様子がおかしい。

「ところで、他のみんなはどうしてる？」

俺が聞いても、ちよつとポーツとしてるような感じで、慌てて、

「み、みんな？」

と聞き返す始末だ。

「千鶴さんちだよ」

「あ、ああ、楓たちはみんなホテルで待ってるよ。もっとも、千鶴姉はまだ寝てるかも知
れないけどね」

「へえ、結構朝寝坊なんだな」

「…そりゃ昨日遅くまでここで待ってたからね、千鶴姉は」

「ありやりや」

「『ありやりや』じゃないだろ。で、今朝はあたしが待ってる事にしたんだ」

「そうか、本当にすまなかったな…」

と、俺は梓に向かって軽く頭を下げた。すると、

「え…あたしは別に何とも思っていないからいいよお」

…何だかいつもの梓じゃない。その時俺はそう確信した。

「なあ、梓」

「な、なに？」

相変わらず返事につまづいてるし、何だか落ち着きもない。一体何が原因なんだろう。

「お前、何か変じゃないか？」

「変って？」

「いや、いつもの梓らしくないって言うかな…」

「そ、そんなこと…ないじゃない」

明らかに返事につまってるのに、どこが「そんなことない」だ。

「なあ、お前……」

と、言いながら俺は梓ににじり寄る。こいつは何かを隠してるに違いなく、どうにかしてそれを聞き出さなくては。

「な、何だよ…耕一い」

ほら。

あの梓が何となく怯えてるじゃないか。

「…何ビビッてんだよ？」

「え…」

「何か後ろめたいことでもあるんだろう…梓」

「な、何言ってるのさ…」

明らかに語尾が弱まっている。もしかしたら、こいつは梓の偽者なのかも知れないな。いや、きっとそうだ。だいいち梓がこんなにおとなしい訳がない。

さっきよりも確信を強く持って、俺は梓に迫る。

「お前、梓じゃないだろう？」

すると、ニセ梓は思いつきり動揺していた。当然だ。

「なっ、何言ってるのさ、アンタ頭がおかしくなったんじゃないの？」

「ふん、予想通り動揺してるな、ニセ梓め」

「当たり前じゃないのっ、いきなり偽者呼ばわりされたんだから」

「動揺すると言うことは、お前が偽者であると言う何よりの証じゃないか」

「ばっかっ！ そんなの当てになんないよ！」

「他にもあるぞ」

「な、何よ…」

「お前のヘアバンドの色がいつもと違う。大体偽者と言うのは、ほぼ似せてるがマフラーとか一部の色が違ったり、利き手が逆だったりするものなのだ」

「あたしだっていつも同じ物付けてるわけじゃないよっ」

「だが、柏木家にいた時は、いつも同じだったぞ。だから梓はそれしか持ってないか、まったく同じデザインのを複数個持つてるかのどちらかなんだ」

「…そりゃ、ちゃんとした理由があったよ…」

「ほお？　どんな理由だ？」

「うっ……そ、そんなこと言えるわけないじゃない……」

「おや、どうしたんだろう。」

あの梓が……ニセ梓が顔を赤らめているじゃないか。

そう言えば、ここに入って来た時もそうだったな。

ここは一つ試してみるとしよう……

「なあ、ニセ梓……」

と言つて、俺はニセ梓ににじり寄つていった。

「な、何だよ、その『ニセ梓』つてのやめてくれよ」

相変わらずニセ梓は動揺をかくせないでいる。そればかりか、やっぱり顔を赤らめているようだ。こいつはそう言った方面で攻めていけば案外弱いかも知れない。

「……いや、悪かったな、梓……」

まずは懐柔しなければ……

俺は本当にすまなそうな顔でニセ梓に謝った。

「え……、い、いいよお、何か耕一変だよ」

変はお前だろうが……

さて、ここいらで本格的に行くとするか。

「実は俺さ、お前のが好きだったんだ」

「えっ！　そ、そ、それつて、な、なんだよ、いきなり……」

脈絡も何もない展開だが、そんなことに気を回すような余裕は……ニセ梓にはないらしい。

ま、当然と言えば当然だ。言った俺も自分で少し驚いているくらいだからなあ。我ながらよくこんなセリフがすらっと言えるものだ。

「いや、今日のお前が普段と違ったもんで、何となく気になってたんだけどさ……」

「こ、耕一い……」

「だけど、あんまりお前が可愛いもんで、ついからかいたくなつたんだ」

「え……」

おー、顔から火が出そうなくらいに真っ赤になってるぞ……。これくらいでこんなになるなんて、意外とこいつって可愛いトコあるんだな……って、何言つてんだ俺は……。

「なあ、梓……」

真っ赤になつた梓の顔にそつと近づく。

梓の体勢はすでに逃げ腰。だが、正座していたのを崩しているだけなので、妙に艶めかしい。

「……こ、耕一、な、何する気？」

どことなく怯えを含んだ声で、俺に向かって梓が尋ねたが、こういう体勢および状況ですることと言えば、一つしかない。

「……そりゃ、一つしかないだろう？」

と言いながら、俺が梓の肩に手を乗せると、心なしか梓の肩は震えているようだった。

「え、一つって……きやつ」

梓がそれ以上言う前に、俺は強引に梓を組み伏せた。

さて、これだけやれば本物なら「この、スケベ野郎！」とか言いながら、俺に強烈な一撃を繰り出してくるはずだ。

「梓……」

梓は大した抵抗もせずに、俺の下にいる。

俺は組み敷いた梓の表情を確認しながら、ゆっくりと梓の反応を待った。

静かな部屋の中で、どくんどくと梓と俺の鼓動だけがやけに耳についた。

「……」

だが、しばらくそうしても、梓は何も動こうとしなかった。ただ、じっとしているだけだ。

…おかしい。

どうして鉄拳が炸裂しないんだ？

どうして蹴りが乱舞しないんだ？

やっぱりおかしいぞ。こいつは本当に偽者なんだろうか？

それ以前に、こんな体勢でいると、何だか俺も落ち着かない。

「あ、梓……」

と、声を出しても、梓は俺から顔をそむけてじっとしているだけだ。ただ、豊かな胸が梓の呼吸に合わせて上下している。

と、俺がそのさまを見ていると、不意に梓が顔を動かして、一瞬だけ俺と視線を合わせた。そして、すぐにそらしてしまう。

「……よ」

梓が横を向きながら、何かを言ったようだ。

「な、何だ？」

「……………いよ」

「いよ？」

「……………いいよ」

「いいよ？ って、何が？」

「……………耕一なら……………いいよ」

……………プツリ、と何かが俺の中で切れた。

こ、こいつは絶対に本物じゃない！

梓がこんなこと言うわけじゃないじゃないか。

「……………梓」

梓は何も答えない。ただ顔を真っ赤にしているだけだ。

どうしたらいいんだろう？ 何だか知らないが、こうしていると俺も段々妙な気になって

きたみたいだ…。

す、据膳食わぬはなんとやら…と言うやつか？ いや、待て。このパターンはどこかで

あったような気がするじゃないか。このまま俺が梓をいただこうとすると、突然梓が「あ

んたが悪いんだからね」とか言って、俺の腹を刺したりしないだろうな……………まさか…い

や、梓ならありうる話じゃないか……………。

うーむ、このままこうしても、埒があかないな。

と、俺が何もしないでいると、梓が小さくつぶやいた。

「……バカ」

「な、何だとお？」

と、俺が言い返した途端、

「耕一の大バカ野郎っ！」

ひときわ大きな罵声とともに、俺の体は大きく跳ね上がり、そのまま壁に後頭部を強く打…。さらに足はテールブルにぶつけてしまい、体の上と下に激痛を感じてその場で転げ回ってるしか出来なかった。

「この馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿……」

一体「馬鹿」をどれほど繰り返したのか分からないが、その後梓はすつと立ち上がって、そのまま出ていってしまった。

オイオイ…。

散々期待させといて、挙げ句の果てには「馬鹿」の連呼で、このざまか？

何だか本当に馬鹿みたいじゃないか。ま、腹刺されるよりはマシか……。

……………。

って、ここでのんきにしていいのか？

………そうだよ。

…追いかけるなきや、梓を。

なんでかかって？ そりゃ、こうした展開ではそれがお約束だからだ。

と言う訳で、俺はまだ痛みの残る頭を抱えながら、外へ向かった。

俺が外に出て最初に思ったのは、梓が現役の陸上部員だったと言うこと。と言うのも、

俺が出た時はもう梓の姿なんてどこにも見当たらなかったからだ。

…三年生なんだから、とつくに部活動を引退してもいい時期なのに、梓は下級生に人気があるらしく、いまだに部に残ってる。ま、中にはかおりちゃんみたいな子もいるが、梓もあれで面倒見がいいから放っておけないんだろう。

…と、今はそんなことを考えてる場合じゃないな。とにかく梓がどっちに行ったのかをどうにか調べないと…。

俺はとりあえずアバートの前の道に出て、左右を繰り返して見るが、やはり梓の姿はない。だが、何よりも明確な手がかりがあった。

ある一方のみ人が倒れているのだ。まるで、巨大なイノシシでも通った後のように左右になぎ倒された…と言う表現が正しいかも知れない。

もちろんそれは梓が通った後に間違いはない。都会の人込み慣れない上に感情的になつた梓に、もはや「人を避けて走り抜ける」などと言う高等技術は不可能だ。

ヤレヤレ…とため息を一つついて、俺がその獣道を追いかけようとした時に俺の後ろから誰かが呼んだ。

「耕一お兄ちゃん！」

この場所であろうがなろうが、俺のことを「おにいちゃん」と呼ぶのはただ一人しかない。

「初音ちゃん」

俺は振り返って、声の主を確認した。返事をしながらだから、確認と言うよりは確信しながら言うのが正しいな。

「おはよう、耕一お兄ちゃん」

初音ちゃんは小走りに近づいて来て、少し息を弾ませながら笑顔で挨拶をしてくれた。…やっぱりこの辺は梓には出来ない芸当だな。

「初音ちゃんだけ？」

俺がそう聞くと、初音ちゃんは可愛らしく首を振りながら、

「ううん、お姉ちゃんたちも一緒だよ。ところで、先に梓お姉ちゃん来てなかった？」

と逆に俺に質問してくる。う、うーむ。正直に答えたものかどうか……。

「いたと言えただけだね……」

ひとまず俺は言葉を濁して、余計な追求をかわそうと試みた。

「実は耕一お兄ちゃんを見つけた前に、何となく梓お姉ちゃんらしい人影を見たんだけど……わたしの勘違いかなあ……」

「初音ちゃん、それってどのくらい前で、どこで？」

「え、お兄ちゃんを見つめるちょっと前の、この先……」

と言って初音ちゃんが指差したのは、先ほど俺が梓の通った後と断定した方向だった。

「そうか！　さんきゅ、初音ちゃん、それじゃ！」

俺はそれだけ言うとその方向に向かって走り出した。

「えっ、耕一お兄ちゃん、どうしたの！」

初音ちゃんの声を背中で受け止めて、でもそれには答えずじままただひたすら道を急いだ。

何故急ぐのか？

暴走した梓は危険だ。このままではいずれ死人を出すかも知れぬ……。

…違う違う。

自分でもよく分からないが、梓だって俺に追いかけてきて欲しいと思ってるに違いないんだ。

それにしても……。

俺はさっきからほとんど全力で疾走している。ほんの少しだけ、エルクウの力を出しながら、だ。

固定された障害物を避けるのは実にはやすいことだが、動く障害物すなわち通行人に当たることも全然なかった。特に注意を払っていた訳でもない。邪魔になるような障害物はすでに除かれている……と言う訳だ。

まったく梓の奴め……。ここまで無分別とは思わなかったな……。これからあいつとやりあう時は気を付けるようにしよう。

……と、走り始めてから数分。

……まだなのか？

……いくらエルクウの力を出してるとは言っても、結構つらいぞ、これ……。

と、いい加減に力がめげ始めた時だった。

人込みの中に出て来た獣道が途絶えているのだ。俺がそこで急停止して、あたりを見回したが、梓の姿はない。大体、この倒れた人込みを頼りにしてきたけど、今まで梓を発見できてないのも不思議だ。

もしかして、俺は全然違う物を追っかけていたとか？ いやいや、そんなことはないはず。いくら梓でも、俺が追いつけないはずは……ない……と思う。

いや、待てよ。

確かこの先に小さな公園があったような気がする。

まさかとは思うが、そこで泣きながらブランコなんかをキイコキイコ…とこいだりしてないだろうな。

…：…だいいち、そんな展開でいいんだろうか？

でも、梓ってあれで結構古臭い奴だからなあ。って、古臭いつて言ったら可哀想かも知れないから、言い直そう。梓は結構オバサン臭いところがあるから、古典的な行動をとってるかも知れんな…：。

…：とりあえず、行ってみるか。

そして、俺が公園の中に入ると、梓の姿は実にあっさり見つかった。それも予想通りと言うか、絵を描いたようにそのままの姿で。

梓は性格は乱暴でも、そのプロポーションは四姉妹随一を誇っている。よくも収まった物だと感心するくらい小さなブランコに腰を下ろして、うつむき加減で小さく前後に揺らしている。そして、キイコ…と小さくブランコの音だけが響いていた。

俺は一瞬言葉を失った。

これがあの梓か？

俺を蹴飛ばして、無関係な町の人々を殴り倒して行った狂暴な奴なのか？

…：だが、そこにいるのは一人の女の子に過ぎなかった。触れれば壊れてしまいそうな感じさえするほど、か弱い女の子が。

…：本当にこれは梓なんだろうか？ 俺は夢でも見てるのか？

いや、それこそ違うんだ。

俺は分かっていたんじゃないのか？

梓が心底から乱暴者ではないって事を。

梓のうわべに隠された優しさや女らしさなんてのを、ちゃんと分かっていたじゃないか…。

「梓……」

俺がそっと声を掛けると、梓はゆっくりと俺の方を向いた。

「…こう……いち……」

梓の瞳は赤いままだった。

声を掛けてみたものの、この後何と云えばいいのか、さっぱり分からない。俺と梓はお互いを見つめたまま何も言わずにじっとしていた。何かを言おうとは思うのだが、言葉が出てこない。

そして、そのまま時間だけが過ぎて行く。

最初に沈黙を破ったのは、梓の低いつぶやきのような言葉だった。

「…何しに来たのよ…」

「お前を追いかけて来たに決まってるじゃねーか」

俺が答えると、梓はわずかに動揺を見せたが、すぐに言い返してきた。

「…一人になりたかったのに、大きなお世話だね」

わずかにカチンと来たが、ここで俺が感情的になってはしょうがない。

「…ほっとけねーだろ？」

「……どーせあたしはニセモノで、ほんとの梓じゃないし、あんたに余計な心配してもらう義理はないんですよ」

ますますカチンと来たが、ここが我慢のしどころだ。

「まだそんな事言ってるのか、お前……。そんな事にこだわるなんて、それこそ梓らしくねえぞ」

「悪かったわね。でも、そんな事耕一には関係ないじゃない！ あんたこそ全然いつもの耕一らしくないわよ」

突然声を荒げて梓がまくし立てる。

「何い？ 俺が苦しい思いまでしてお前を追いかけて来たのは、何のためだと思ってるんだよ！」

「そんなの、あんたの勝手でしょ！ あたしの知ったこっちゃないよ！」

梓は叫びながら、ブランコから立ち上がった。そして、そのまま俺の正面に構える。梓の手は自然に握りしめられている状態だった。

来る！ そう思った次の瞬間、梓の拳が俺の顔面めがけて迫ってきた。

俺はそれを難なくかわし、梓に尋ねる。

「何言ってるんだよ、お前。大体なあ、俺がいつもと違うって何の事だよ」

だが、梓はすぐに体勢を整えて、二撃三撃と拳を放つばかり。

「うるさいっ！ 黙れ、このバカ耕一い！」

これは完全に八つ当たり状態だな……と、俺は冷静にそれを受け止めて、ひとまず梓の攻撃をすべてかわしていく。普段の状態ならいざ知らず、エルクウの力を発揮してなお梓に

引けをとるような俺ではない。

「このっ、このお！」

それでも梓は止めようとはしなかった。いつまでもこうしてる訳にも行かないので、俺は梓の拳を受け止めて、それを掴む。

「あっ、離さないよ！」

「…なあ、梓。もう止めろよ…。こんな事をしてる場合じゃないだろ？」

諭すように俺が落ち着いた口調で言うと、梓はぴくりと動きを止めた。

「…そうだね。少なくともバカ耕一とこんな事してる場合じゃないね」

バカは余計だなど思ったが、ともかく梓も少し落ち着いたところで、少しずつ聞いてみる事にした。

「…一体何が俺が変だと思ったんだよ？」

「…あんたが約束破るとは思ってたんだ、あたしはね…」

「すまん…」

「もしかしたら何かあったのかも知れないなんて考えながら、あんたの部屋の前で待ってたら、あんたが何食わぬ顔で帰ってきてさ…」

「……」

「その顔見た途端に怒りが込み上げてきたんだけど、それ以上に安心しちゃったんだ、あたし……」

「そうか…、本当にすまなかったな」

「それで、何て言おうか悩んでたら、妙に意識しちゃってね、あんたの事。おまけに『部

屋に入れ』なんて言うじゃない……」

「それがどうかしたのか？」

俺の問いに対し、不意に梓の顔が赤みを増していく。

「……あたし、男の人の部屋に入るのって……は、初めてだったから……」

「うそ……」

とつぶやきながらも、それが本当に違いないと言う事をおぼろげに理解していた。何せ四姉妹は揃いも揃ってちょー奥手ばかり。先ほどの梓の様子もそのせいに違いない。

「ずっと緊張してたら、突然耕一が『ニセモノだろ』なんて言い出すし……」

「……あの時はほんとにそう思ってたんだ……。余りにも普段と違ったからな」

「……でも、ちよつとは……期待もしてたんだ……」

「期待？ 何をだ？」

「そつ、それは……」

それきり梓は顔を真っ赤にして、何も言わなくなった。そして、俺はすぐに梓の言いかつた事を理解した。と同時に、凶らずも俺の顔も赤くなるのが分かる。

「お、おい、それって……」

梓は小さくこくりと頷くだけ。

う……、こいつにもこんな可愛らしい芸当が出来るとはな……。なまじ普段とのギャップが激しいだけに、その破壊力は楓ちゃん以上かも知れない。やっぱりこいつも柏木美人四姉妹の一人だったのだ。

……困った。

ここまで展開してしまった以上、後には引けないじゃないか。

「あ、梓……」

こうなりや真剣に心を決めるしかない。さっきとは違って、本当の本気で。

「耕……」

梓も俺のそんな気持ちを感じ取ったのか、ゆっくりと目を閉じた。

今の梓が可愛く感じて思わず手を出してしまったと言うような、うわついた理由なんかじゃない……はずだ、と思う。

俺は黙って梓を抱き寄せると、そのまま梓の閉じられた唇に自分の唇をそっと重ねようとした。

ちょうど、その瞬間だった。

「あ、いたいた。耕一お兄ちゃん！」

天使の一声が俺と梓の耳に入ったのは。

俺と梓はもはやパニック状態で、キスどころではない。

「初音ちゃんっ！」

「耕一お兄ちゃん、いきなり走り出したから、追いかけるのすっごく大変だったんだよ。……あれ？ 梓お姉……ちゃん……？」

とたとたと俺の近くに走り寄ってきた初音ちゃんは、ようやく梓の存在と、その場の雰囲気気づいたらしく、顔を赤らめてうつつむいてしまった。

「あ……そ、その……梓お姉ちゃん……耕一お兄ちゃん……」

初音ちゃんは自分の両手を遊ばせながら、もじもじとしている。

「…そ、そういう事は…お外で…やらない方が…」

「は、初音…」

言われたおかげで余計に気恥ずかしさを増したのか、梓が思わず言葉を返したが、特に意味はなかった。そして、気まずい雰囲気はしばらくの間、その場を完全に支配していた…。

ようやく気を取り直したのは、公園の入り口に千鶴さんと楓ちゃんの姿が見えた頃だった。さすがに、皆が揃った状態で呆けてる訳にも行かない。

「さてと、それじゃ戻るか…」

俺がさり気なく提案すると、梓も普段の調子で答えた。

「そうだね、こんなどこにいても話が進まないしね」

「うん、せっかく耕一お兄ちゃんのところに来たんだもの」

初音ちゃんも笑顔でそれに続き、ゆつくりと入り口の方に歩き始めた時。ふと俺は先ほど気になった事を思い出して、何気なく梓に聞いてみた。

「なあ、梓。お前のヘアバンドが同じ理由って何だよ？」

すると梓は慌てた様子で、

「な、何だよいきなり…。ど、どうでもいいよ、そんな事」

と答えを出し渋っていた。だが、そこに初音ちゃんが

「梓お姉ちゃんのヘアバンドって、何の事？」

と話に加わってきたので、すかさず俺は説明をする。

「俺が柏木家にいた時って、梓はいつも同じ白いヘアバンドしていただろ？」

「…耕一」

「ひーっひっひっひっひっひっひっ……」

ああ、駄目だ。腹がい、いてえ…。

「…いつまで笑ってんだよ…」

「くっくっくっくっくっくっ…苦しいくっくっくっ」

「…このバカヤロー！」

凄まじい音ともに、突然目の前が真っ暗に。

と、同時にお星さまがきーらきーら…と、目の前を飛んでいる…。

どうやら、梓のフルパワーの正拳をともに食らってしまったらしい。

意識が徐々に遠のいていく中で、俺の耳には初音ちゃんと梓の言葉が遠くから入ってくる。

「耕一お兄ちゃん！」

「フンッ！ いつまでも馬鹿みたいに笑ってるからだよ！」

…ったく、こんな時でもこれしかないのか、お前はよ…。

まあ、これも梓の愛情表現の一つだってことは…分かってるけどな。

「フツ…今のはメツチャ効いたぜ…」

どうにか、余裕の笑顔を作りながら、かろうじて俺はそれだけを言葉にした。とにかく、俺も柏木の血を引いててよかったな。普通の人間じゃあ、梓の直撃なんて食らったら…どうなる事やら。

「自業自得だよ、ボケ耕一！」

…鼻息を荒くする梓の様が見て取れそうだったが、俺はすでにそれを見ることは叶わない。だが、本当に意識が途切れる寸前に、初音ちゃんがぼそりと一言告げた。

「…耕一お兄ちゃんって…もしかして、マ…」

……それは言わない約束でしょ、初音ちゃん……きゆう……。

(了)

『エルクウ・キラース5B 梓編』

後書き

『エルクウ・キラース』

5分岐B、梓編

追加コメント(1999/07/28)

書式統一の改訂です。

初版 a s h

1999/07/28 改訂 a s h

2001/06/24 改訂 a s h

PDF書式変更:2016/05/22